

「馬鹿者を命ず！」

第二十回 まちおこしへ一歩前進 その三 渋谷和宏

イラスト ● 丹下京子

中林修 (なかばやし・おさむ)
65歳、二名島バッテリーの秘書室長で榎太一の側近。

大渡晴美 (おおわたり・はるみ)
45歳、伊予南市長。大渡薫子の母。

新庄誠人 (しんじょう・まこと)
39歳、伊予南市役所・地域振興課長。

登場人物

石打悠太 (いしうち・ゆうた)
25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

大渡薫子 (おおわたり・かおるこ)
21歳、伊予南市長である大渡晴美の娘、京大阪大学で建築を学ぶ。

榎太一 (えのき・たいち)
76歳、二名島バッテリーの創業者で社長。ビジネスの世界ではカリスマ創業経営者として知られる。大渡晴美は娘、薫子は孫。

「一緒に尾花市に向かいませんか。変な意味じゃなくて、尾花市で泊まる部屋ももちろん別々で」

「ぜひ一緒にしましょう」

悠太は薫子に言った。

午後三時半、悠太は東京駅構内にある東海道新幹線の切符売り場に来てきた。

薫子は先に待ち合わせ場所に来ており、悠太に気づいてベンチから立ち上がり手を振った。

「三時五十分のぞみの指定席を二人分買っておきました。並んで座れる席がまだ少しだけ残っていたんです」

「ありがとう」

悠太は恐縮して何度も頭を下げ、立て替えてもらった分を清算した。

薫子と一緒に旅行できるなんて地面から二、三十センチほど浮きあがっている気分だった。尾花市までは、東京から新幹線であ

前回までのあらすじ

悠太は、西朱雀地蔵通りの空き店舗活用のプレゼンを行った。東京に来ていた大渡薫子から再生古民家見学に誘われ、一緒に出掛けることに。大渡市長は、榎に工場移転中止を交渉するが経済的メリットがないと断られる。

岡山に行き、そこから在来線に乗り換えて合計四時間ほどの道のりだ。その間、薫子とずっと一緒にいられるなんて、しかも新幹線のぞみの車内では隣同士だなんて、予想もしない幸運に悠太は心臓の高鳴りを抑さえられなかった。

「行きましょう」

薫子は悠太の手を取って歩き出した。

悠太の心臓の鼓動はさらに激しくなった。薫子はスリムなブルージーンズに白いTシャツという格好で、それが女性らしい体のラインをいつそう際立たせている。歩くたびに揺れるポニーテールが可憐で、悠太は後ろから抱きしめたい衝動に駆られたが、必死に抑さえて階段を上がった。

のぞみはすでに入線していた。二人掛けの席に薫子と並んで座った悠太はこれから始まる夢の時間に心を躍らせた。

目を覚ました時、外はすでに暮れかけて

おり、沿線の風景と自分の眠そうな顔が車窓に二重写しになっていた。

悠太はあくびしながら腕時計を見た。午後六時を過ぎているので二時間以上眠ってしまったらしい。今走っているのは京都の手前あたりだろうか。

悠太は「ワゴンサービスが来たらお弁当買おうか」と話しかけるつもりで横を見た。薫子はいない。

薫子との旅は夢だったのかと一瞬思ったが、車両を仕切るドアが開いて薫子が戻ってきた。

「薫子さん、ワゴンサービスが来たらお弁当……」

「石打さん、ごめんなさい！ お部屋が取れなくて」

悠太はきよとんとした。

「あたしが泊まる尾花駅前のグリーンバレー・ホテルに電話したら、お部屋はもう一つも空いていないって」

「薫子さんが謝ることはないよ」

悠太は手のひらを振った。

「尾花駅に着いたら観光案内所で他のホテルを紹介してもらうよ。気を遣わせてしまっ

って申しわけない」

薫子は安心して微笑んだ。

車内のワゴンサービスがやってきて悠太と薫子は弁当を買った。悠太は缶ビールを

追加した。

弁当を食べながら、薫子は尾花市での古民家再生プロジェクトについて説明した。

瀬戸内特有のおだやかな海と背後に連なる山々に挟まれた尾花市には、かつて造船で栄えた歴史や独特の地形から、ほかの地域には見られない街並みや建物が数多く残っているという。

海岸に近い中心街には、造船業が全盛だった往時をしのばせる町家や、茶室、土蔵を備えた屋敷、石造りの堂々たる洋館が点在する。一方、山に近い傾斜地には眺望を何よりも重視して設計された三階建ての木造家屋や、親子孫三代にわたって増改築を重ねた個人的な家が少なくない。

ところが高齢化と人口減少によって傾斜地を中心に空き家が増え、今や尾花市の六軒に一軒は住む人が無く放っておかれているという。中には建築的価値の高い古民家もあるが、住む人を失った家の傷みは急速に進んでいるらしい。

「以前、尾花市の空き家を取り上げたニュース番組を見たことがあります。その様子に胸が張り裂けそうでした」

薫子は悲しげな声を出した。

「朽ち果てようとしている空き家には、張り出したテラスから港を見下ろせる洋館や、あのガウディが設計したような不思議なデ



ザインの商家がありました。そんな貴重な古民家が失われていくなんて、あたしには耐えられませんでした」

「そんな可哀想な古民家を再生しようというプロジェクトが動き出しているんだね」

「そうなんです」

薫子は明るい声を出した。

「NPO法人尾花古民家再生会議という団

体がプロジェクトを進めています。あたしが今日、講演を聞いた守屋良子もりやらうこさんはその代表を務めていて、明日、私たちを案内してくれるとおっしゃっています。守屋さんたちは企業や個人の賛同者を募り、尾花市の協力を得て、古い町家を再生して喫茶店にしたり、傾斜地の洋館を改修してホテルにしたり、古民家に住みたい移住者をホームページで募ったりしているんです」

「成果は出ているのかな？」

薫子はうなずいた。

「町家を再生した喫茶店や、洋館を改修したホテルはどれも繁盛しているそうです。古民家に住む若い人たちも増えている、と守屋さんはおっしゃっていました。守屋さんによれば、それもこれも尾花市が人気ある観光地だからだそうです。尾花市の街並みは本当にいい雰囲気で、たくさんの観光客がやってきます。瀬戸内しまなみ海道が開通してからはサイクリングをする人たちも集まるようになりました。今では毎年六百万人以上の観光客がやってくるそうです。すごいですよ、そんなに来るなんて」

薫子は食べ終えた弁当箱をビニール袋に入れ「明日、再生した古民家を案内してもらうのが本当に楽しみ」と伸びをしながら言った。

弁当を食べ終えた悠太はビールを飲んだ

数秒遅れて雷の音が響いた。

悠太はまた悲鳴を上げかけたが、それをかき消すように薫子が悠太の腕にしがみついた。

悠太の心臓が激しく収縮する。

「雷、近いですよね」

「そうだね」

「近くに落ちたりすることもありますよね」

「それは大丈夫だと思うけれど」

「ほかに部屋がないのなら、一緒に泊まりましょう」

薫子は体をさらに悠太に密着させて言った。

書斎のドアがノックされ「榎さま、中林さまがいらっしやいました」と家政婦の声がした。

榎は「どうぞ」と声をかける。

ドアが開き、秘書室長の中林修が現われ「石打悠太の件でご報告に参りました」といつものように堅苦しい口調で言った。

「夜分申しわけないな。座ってくれ」

榎は中林をソファに座らせ、書棚からブランデーを出して「飲むか？」と聞いた。

「いえ、車ですから。会社から直接こちらに参りました」

向かいに腰を下ろした榎は仕方なしに自

せいか再び眠気に襲われた。

せっかく薫子が隣にいるのに、薫子もつといるんな話をしたいの、まぶたが重くて目を開けていられない。

目を閉じた瞬間に気が遠くなり、目覚めた時には二人を乗せたのぞみは岡山駅に着しようとしていた。

岡山駅で在来線に乗り換え、二つ目の駅を過ぎたあたりで雨粒が车窗を伝い始めた。尾花駅に着くころには雨脚はさらに強まり、大粒の水滴が音を立ててプラットホームに叩きつけられていた。

駅構内のコンビニエンスストアでビニール傘を買った二人は、駅前ロータリーの外れにある観光案内所に向かった。

観光案内所の営業時間は幸いなことに午後八時半までで、カウンターには案内係の男性がいた。

悠太は「今晚、泊まれる宿を探しているのですが」と尋ねた。

四十がらみの案内係は顔を曇らせた。

「明日と明後日、自転車のイベントがあって今日はどこも満員なんです。二人？」

「いえ、一人です」

案内係は宿泊施設のリストを悠太に見せて、一番下の旅館を指さした。

「もしかしたら空いているかもしれないの

分のグラスだけにブランデーを注いだ。

「石打悠太の査定はどうだった？」

「『おおむね問題なし』と言えそうですが『完全に問題なし』とは言えません」

「ややこしいな」

中林は自分の鞆を探り、厚く膨らんだ封筒を取り出した。

「興信所の調査員が撮った写真があります。ご覧になりますか？」

「私は隠し撮りした写真を見る趣味はないよ。君からかいつまんで説明してくれ」

「石打悠太は西朱雀プロジェクトの事務所兼社宅で若い女性と同居しています」

「なんだと？」

「申しわけありません。今の言い方にはいささか語弊がありました。事務所兼社宅にはほかに西朱雀プロジェクトの男性社員と、システムエンジニアらしい年齢不詳の男性がいます。若い女性は西朱雀プロジェクトの仕事を手伝っていて、石打悠太たちと一緒に生産者を訪ねたり大渡晴美市長と面会したりしています」

「その若い女性は石打悠太の彼女ではないんだな？」

「断言できませんが男と女の関係ではないと思われま。別の女の影も石打悠太にはありません」

榎はうなずきブランデーを飲んだ。

はこちらぐらいだね。駅からかなり離れているけれど、いい？」

悠太はうなずいた。

案内係は旅館に電話をかけ「駅前の観光案内所だけ」と言ったが、すぐに言葉を呑み込み悠太に向かって首を横に振った。「ふだんは使っていない部屋も埋まっているそうだ」

「ほかにはありませんか？」

「一泊三万円の旅館が空いているかもしれないけれど、どうする？」

悠太は大枚を払う覚悟を決めて「お願いします」と言った。

しかし結果は同じだった。部屋はひとつ残らず埋まっているという。

「今日は尾花市に泊まるのを諦めて岡山か福山に行ってもらうしかないね。実はさっきの電車でやってきた旅行者たちにも諦めてもらったんだよ」

悠太はうなずいた。

薫子と離れ離れになるのは寂しいが、考えてみたら尾花市内に泊まったとしても宿が別々なのは一緒だ。

悠太は「岡山か福山に泊まることにするから」と薫子に言い観光案内所を出た。

雨脚はさらに激しさを増しており、近くの空で稲光がひらめいた瞬間、雷が苦手な悠太は危うく悲鳴を上げかけた。

「薫子さまとお付き合いを認めるおつもりですか？」

「そんな答めるような目をするなよ」

榎は苦笑した。

「薫子がまんざらでもないのなら、それもまあいいんじゃないかと思っただけだ。結婚するわけじゃないんだから」

「前にも申し上げましたが、不似合いですか不釣り合いと言いますか」

榎は釈然としない中林の顔を面白そうに見つめ、自分のグラスにブランデーを注ぎ足した。

「今の薫子には一度、男と交際してみる経験が必要なんだよ。あいつは男を知らないせいか古民家に夢中で、今にも『古民家と結婚したい』と言いだしそうな勢いだ。それに君に以前話したと思うが、石打悠太はなかなか面白い奴だよ」

中林は榎の言葉が理解できないという顔をした。

「薫子さまが古民家ではなく『石打悠太と結婚したい』と言いだしたらどうします？」

「そのリスクは確かにあるな。薫子はおしとやかに見えるが、根は晴美に似て情熱的なところがあるからな」

「だったらなおさらです。どうします？」

「もちろんただでは認めない。俺が晴美たちに出している宿題を石打悠太が解いてく

まちおこし特命社員
石打悠太

馬鹿者を
命ず！

れるのが条件だ。俺はあいづらにこう言ったんだよ。『伊予南市にとどまった方が二名島バッテリーにとって経済的メリットがあるという証拠を見せてくれたら、二名島バッテリーの工場移転を撤回してもいい』と」

「難題ですね」

「その通り。解くのが困難な宿題だ。ということは……」

「薫子さまが石打悠太と結婚することはない」

榎は笑みを浮かべ、ブランドーを喉に流し込んだ。

新庄は事業計画書をもう一度始めから終わりまで読み、誤字・脱字が無いのを確かめてからパソコンを閉じた。

大渡晴美市長が議長を務める明日の幹部会議でこの事業計画書が承認されれば、伊予南市のまちおこしを担う新会社がいよいよ動き出す。そうなれば新庄は今月末で長年勤めた伊予南市役所を退職し、新会社の社長となる。

新会社の社名は「伊予南プロジェクト」だ。新庄と広岡とで三時間ほど検討し、以上の候補を晴美に提案したがすべて却下され、広岡と再度話し合っ出て出した候補もまた蹴とばされ、結局、晴美の独断でこの

社名に決まったのだ。

デスクの電話が鳴った。

晴美からだだった。どうして彼女のことを考えると決まって彼女から電話がかかってくるのだろうか？

「居残って仕事をしているなんて感心じゃない。今からちよつと出てこれられない？」

晴美はいきなり言った。

「どちらまでですか？」

「家の近所にあるバーで飲んでいるのよ。父の工場移転阻止に向けて小さな一歩を踏み出したことに祝杯を挙げているの」

「ヴィンセント・ファンドが我々の提案に応じてくれたのですか？」

「その通り、さつき最高経営責任者のマイケル・ヴィンセントから、私たちの言い値で二名島バッテリーの株の売却に応じるとのメールを直接もらったわ。私たちが買取価格を提案したのは今朝だから、返事が来るまでには一日もかかっていない。それだけ焦っていたのでしょうね」

「ヴィンセント・ファンドが私たちの提案に応じてくれたのはうれしい知らせですが、この先、私たちは発行済み株式の三分の一を買取して拒否権を得られるでしょうか。ヴィンセント・ファンドにできなかった芸当を私たちができるのかという意味です」

「だから『今からちよつと出てこれられない？』と頼んでいるんじゃないの？」

「いい？ これからあなたはヴィンセント・ファンドに代わって、二名島バッテリーの元社員たちに『工場移転を食い止めるために持ち株を売ってください』と頼んで回るのよ。あたしは今、あなたとその打ち合わせをしたいの。とつとと来なさい！」

晴美は電話を切った。

尾花駅前にあるグリーンバレー・ホテルのフロントで手続きを済ませた薫子は、二枚のカードキーのうちの一枚を悠太に渡した。

二人は無言でエレベーターに向かう。フロントのある二階は壁一面がガラス張り、ふだんなら尾花港の船着き場や、尾花水道を挟んで向かいにある対岸島の夜景が美しいのだろうが、今は激しい雨に煙って何も見えない。

最上階の六階でエレベーターを降り、部屋のドアを開けた瞬間、稲光が窓の向こうの夜空を切り裂き、間髪入れずに激しい雷鳴が響いた。

薫子は悲鳴を上げて悠太に抱きついた。薫子の胸のふくらみを感じた悠太は衝動に突き動かされ、思わず薫子を抱きしめた。薫子はしばらく悠太の腕の中でじっとし

ていたが、悠太の胸に手をあてて体を離した。

「ごめんさい」

「僕の方こそ、ごめん」

「あたし、雷、駄目なの」

「大丈夫だよ。僕がいるから」

悠太は雷への恐怖で声が震えているのを悟られないように低い声で言った。

二人は部屋に入った。

シングルベッドが一つと、補助用の寝椅子が一つ置いてある。壁際にライトイングデスク、反対側にバスルームのドアがある。悠太と薫子は鞆を下ろし、それぞれ別々のベッドに腰掛けた。

「あの……」

と二人が同時に言い、見つめ合う。

「あの……薫子さん、僕、しばらく部屋を留守にするから、シャワーを浴びてください。雨に濡れたままだと風邪を引いてしまうから」

薫子がうなずき、悠太は立ち上がった。

「あ、でも、石打さんもここにいてください。雷、まだやみそうにないから」

悠太はベッドに腰を下ろした。

バスルームのドアを開けた薫子は、悠太からは見えないようにドアの向こう側で服を脱ぎ、ドアを閉めながらバスルームに入った。

シャワーの出る音がして、悠太の脳裏に薫子の白い裸身が浮かんだ。

悠太は何度も深呼吸して「落ち着け」落ち着け」と自分に言い聞かせた。

稲光はその間隔をいよいよ狭め、雷鳴もより近づいてくる。

シャワーの音が止まり、しばらくしてドアが開いたのと同時に耳をつんざく落雷の音が轟いた。

バスタオル一枚の薫子が悲鳴を上げて悠太の胸に飛び込んできた。

悠太は無我夢中で薫子を抱きしめた。薫子が力を抜いて悠太に体を委ね、バスタオルがカーペットに落ちた。



Kazuhiro Shibuya

作家・経済ジャーナリスト・

大正大学表現学部客員教授。1959年12月、横浜生まれ。

日経BP社で「日経ビジネス」副編集長、「日経ビジネスアソシエ」創刊編集長、

「日経ビジネス」発行人などを務めた後、

2014年3月末、独立。1997年に長編ミステリー

『錆色(さびいろ)の警鐘』(中央公論新社)で作家デビュー。

TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。